「水に流したパン」(2021.2.21)

あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。

（コヘレト 11:1）

2 月 14 日の礼拝後、教会坂道と駐車場に 20 個のミニかまくらを作成し、2 月 15 日と 16 日の両日、私たちは例年通り、ミニかまくらを灯し、会堂を一般公開した。「横手かまくら祭」は、今年コロナ禍、規模を大きく縮小し、ふるさと村だけを会場にし、観光客や地元住民の移動も想定しない形で実施された。また、15 日は雨が降り、16 日は強い風が吹き付けるという悪天候もあり、残念ながら一般の方は誰も来られなかった。

何かを企画し、準備しても、だれにも見向きもされず、徒労に終わってしまったと思えることが時としてある。でも、上掲のみ言葉には、パンを水の上に流すような行為であっても、神様はみそなわしてくださり、月日を経て、流したパンの幾倍もの喜びを与えてくれる、そのような希望を与えてくれる。

今年の私たちのかまくらの営みは、水に流したパンである。月日がたってから、神様がそのパンを大きくして、その味を楽しませてくれるに違いない。ミニかまくらを灯し、「教会がここにあります！神様が皆さんを招いています！」そんなメッセージを発信できたのではないかと思う。実際、一人の人が写真を撮っていた。教会前の道を通り過ぎる車や地元の方が目を止めていた。本当に小さな点である。二匹の魚と五つのパンで大勢の群衆を満たされたイエス様に希望をもって委ねたい。

教会の存立の意味は、礼拝と伝道であり、愛の交わりにある。それが新型コロナのために大幅に制限された 1 年だった。とくに伝道において、予定していた「ゴスペル賛美夕礼拝」も「イブ礼拝」も、そして「教会ミニかまくら」も教会の外に向けて何もできなかった。しかし、希望を失ってはいけない。主は「わたしはここにいる、ここにいる」と主の名を呼ばない民にも呼びかけ（イザヤ 65:1)、伝道の先頭に立ち、そして、私たちの点のような営みをも用いて下さるからである。だから、諦めてはいけないのである。

このような 1 年を踏まえて、次年度どのようなことを心がけるべきか、第 2 回教会懇談会が 3 月 14 日の礼拝後に予定されている。長老会としての提言も準備中であるが、教会員の皆さんからの積極的な発案も期待している。お互いが主にあって成長するために、主の体なる教会の一枝として、心に芽生えている思いを明かしてほしいと願っている。